

福祉みやぎ

CONTENTS (主な内容)

- P 2** 特集
被災者支援のいま 伝えたい“思い”
～この経験をチカラに～
- P 4** Heart&Works (ハート&ワークス)
「一人で悩まないで！」てんかんを正しく理解し、心でつながる
～パープルデーに寄せる てんかん当事者の思い～
- P 6** ひとまちこころ
社会福祉法人白石陽光園
高橋 直也 さん

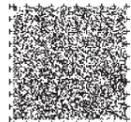
- P 7** グッジョブFUKUSHI
宮城県福祉人材センター
- P 8** ちいきをつなぐ
家庭や社会のサポートが受けにくい
若者たちに安心とチャレンジの場を
- P 10** 県社協ってこんなことやってます
みやぎボランティア総合センター
- P 11** 宮城いきいきシニアだより
第33回宮城シニア美術展
- P 12** 県社協掲示板



タイトル お花畑

作者 生活介護事業所 アトリエ北斗七星 共同作品

メンバー全員で、白い紙粘土を好きな色に染め、丸めたり伸ばしたり楽しみながら自然にお花畑の世界になりました。



音声コードUni-Voice

編集・発行/社会福祉法人宮城県社会福祉協議会 〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17 TEL 022-779-7440(代) FAX 022-272-6800
印刷/株式会社ソノベ 奇数月15日発行 URL <https://www.miyagi-sfk.net>

宮城県社会福祉協議会 職員募集

正規職員 (生活支援ワーカー及び事務)

令和8年度職員採用試験を予定しています。詳細はホームページ等でご案内いたしますので、ぜひご確認ください。



←本会HP「採用情報」



←マイナビ

臨時職員

随時募集しております。詳細はホームページをご覧ください。



←本会HP「臨時職員」

「福祉みやぎ」が新しく生まれ変わります！

日頃から「福祉みやぎ」を手にとっていただきありがとうございます。次号(5月号 vol.645)から、より読みやすく親しみやすい誌面を目指してリニューアルします。

福祉みやぎアンケートへの ご協力をありがとうございます

皆さまからのご回答は、今後の誌面づくりの参考とさせていただきます。引き続き、福祉みやぎアンケートへのご協力をお願いします。

福祉みやぎアンケート

「福祉みやぎ」に対するご意見・ご感想をお待ちしています。



回答はこちら▶

宮城県福祉人材センター
マスコットキャラクター
「ふくしのほっしい」



宮城県社協の
ホームページも
ご覧ください



宮城県社会福祉協議会 検索

宮城県内の福祉施設・介護事業者向けの総合補償制度

宮城県地域福祉総合補償制度をご利用ください

ポイント1

社会福祉協議会の会員である社会福祉施設、介護サービス事業者が加入できます。

ポイント2

地元宮城県で加入手続き・事故対応・その他アフターフォローを行いますので安心です。

ポイント3

団体制度のため、有利な団体割引が適用されます。(一部適用外)

お問い合わせ

社会福祉法人宮城県社会福祉協議会
(株)オンワードマネジメント

TEL 022-779-7440
TEL 022-762-9915

この制度の各補償は宮城県社会福祉協議会が保険会社と締結した保険約款により行います。

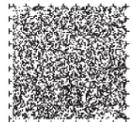


オンワードマネジメントのサイトにリンクします。

この印刷物は、植物性油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。



「福祉みやぎ」は宮城県社協のホームページでもご覧になれます。また、ご意見、ご感想、取り上げてほしいテーマなどをお寄せください。表紙の作品も募集しています。



被災者支援のいま 伝えたい“思い”

この経験をチカラに

令和8年3月11日。東日本大震災の発災から15年が経ちました。
今回は、東日本大震災をはじめ、各地で発生する災害の被災者支援に取り組んでいるお二人に、当時のことを振り返っていただきながら、これからの被災者支援のあり方を伺いました。



一般社団法人BIG UP石巻
代表理事 阿部 由紀 氏

これまでの歩みと現在

東日本大震災の発災当時、石巻市社会福祉協議会の職員として、災害ボランティアセンターの運営業務に従事し、令和5年12月に一般社団法人BIG UP石巻の代表理事に就任。その後、全国各地で発生する災害において被災者支援に取り組んでいるほか、地域との関係性づくりに関する研修の講師を務め、後進の育成にも力を注いでいる。

被災者支援に携わる上で、心掛けていることを教えてください

被災地では、日常とは異なる状況が

突然生じ、多くの方が同時に困りごとを抱えることになりました。支援者は、もともと困難を抱えていた方の生活がさらに厳しくなっている可能性を念頭に置き、支援につながる役割が求められます。

また、被災地には多様な支援団体が集まるため、被災者と支援団体をつなぐコーディネーター力が重要になります。さらに、支援を受ける側も「必要な支援を選び取る力＝受援力」を持つことが欠かせません。

受援力の醸成は、被災者自身の主体性を育み、地域全体の復旧・復興が進みやすくなる一助になると考えています。

被災者の困りごとに対してどのように向き合っていますか

災害時の困りごとは、時間の経過とともに変化し、被災者が直面する課題も千差万別です。さらに被災者が感じる課題と支援者が感じる課題にも



令和6年能登半島地震の被災者との面談の様子

宮城県サポートセンター支援事務所
所でコーディネーターをされていた時のことを教えてください

宮城県サポートセンター支援事務所では、仮設住宅等で生活をされる避難者への支援や支援者育成のための研修、関係団体の調整業務を行ってきました。その時に支援者に対する支援が不足していると感じました。

支援の長期化は、各団体の活動に対する考え方に違いを生み、支援者同士の連携がうまくいかない状況を生じさせました。そこに第三者として関わり、各支援者の思いを代弁しながら、支援調整を行いました。

支援者も一人の人間であり、多くの悩みやストレスがあります。その人や団体の思いに寄り添い、丸ごと受け止めることを意識しながら活動を行っていました。



▲宮城県サポートセンター支援事務所での打ち合わせの様子

被災者支援において大切だと考えることを教えてください

宮城県は「宮城方式」として、被災者自身が支援員となり、研修で支援の知識を得て、実践し振り返るといって口セで被災者支援を行いました。

ここで大切だと感じたことは、支援員を支える表には出ない支援者の存在です。支援員が被災者宅を訪問し、生活状況を伺います。その際に様々な悩みや葛藤が生じ、その「もやもや」を抱えたまま家に帰る、これでは支援員が疲弊してしまいます。そのため、上司等が活動を終えた支援員に今日の出来事や悩みを聞き、それを受け止め、



▲被災者支援従事者研修の様子

助言を行っています。支援員を支える支援者の存在がとても大切だと考えています。

今後の展望についてお聞かせください

「宮城方式」による被災者支援は、

差が見られ、目の前の人が何に困り、何を考え、どうしたいのかを紐解く必要があります。

そのため、まずは話を聞き、少し先のことが想像できるように話を整理していく。正しいと思つことを押しつけるのではなく、聞かれたら答えられるようにしておく。このようなことを思いながら、被災された方々の話を伺っています。

これからの被災者支援で大切にしていきたいことを教えてください

被災地へ出向く際に大切にしていることは、その土地や文化、歴史を理解することです。なぜそのように考え、行動するかは地域性や土地柄が関係していることが多いと感じています。支援者は一時的に被災地に関与することがほとんどであり、引き際を考えることも重要です。

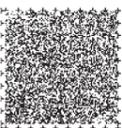
そのため、住民が自ら立ち上がっていく力や今まで培ってきたノウハウを次世代に伝えていくことが必要だと考えています。被災地に行くって困っている人を助けるだけではなく、その地域

多くの人々が支援の担い手として歩み出す契機となりました。東日本大震災から15年が経とうとしています。当時、支援員として活動していた方々が、地域活動に積極的に参加しています。当時の経験や知識が今につながり、それが次世代へと継承されていく循環が起きてくると、人手不足が叫ばれる昨今の現状に対応していく一つの手段になると考えています。

まとめ

阿部氏が大切にしている「受援力を育む」視点と、真壁氏が語る「支援の循環」を生み出す取組には、人と人が支え合う地域共生社会の理想的な姿の一例が示されていると感じます。

被災者の生活に寄り添い、支え合う関係を築くことは、地域で共に生きていく営みそのものです。日常の暮らしの中で人と人のつながりを大切にする姿勢こそが、地域共生社会の実現につながります。阿部氏と真壁氏の実践は、その在りようを体現する取組として、今も息長く続けられています。





「一人で悩まないで！」てんかんを正しく理解し、心でつながる

～パープルデーに寄せる てんかん当事者の思い～

毎年3月26日は、てんかんについての理解を深めてもらうための世界的な啓発キャンペーン「パープルデー」が行われます。この活動は2008年、カナダに住む当時9歳の少女、キャシディー・メーガンさんが始めました。シンボルカラーである「パープル（紫色）」のものを身に着けることで、てんかんをもつ全ての人へ「あなたは一人ではない」という応援の気持ちを伝える取組です。



▲左から宮城県支部代表の松崎幸司さん、沼田裕美子さん、熊谷美香さん、高倉哲也さん、事務局の萩原せつ子さん

てんかんは100人に1人が発症すると言われる身近な病気ですが、今なお誤解や偏見があり、就労の壁や日常生活での困難に直面している方が少なくありません。今回は、公益社団法人日本てんかん協会宮城県支部「波の会」（以下、「宮城県支部」という。）の皆さんに、当事者としての思いを伺いました。

「見た目からは分からないからこそ、理解してほしい」

てんかんの発作は、前触れなく意

識を失い倒れるようなものから、数秒間ぼんやりと一点を見つめるものなどさまざまです。「病気があるかどうかは見た目からは分かりませんが、一人一人症状が違うことを、まずは知ってほしい」と、取材に応じた皆さんは口をそろえます。生後1歳半で脳炎の後遺症によるてんかんを発症した沼田さんは次のように話します。「周囲の人と何も変わらないように見えるかもしれませんが、私は発作で意識を失ってしまうことがあります。自分では何が起きているか分からないからこそ、まずは周りの方に『こういう病気なんだ』と正しく理解してほしいです。それが一番の願いです」



▲思いを分かち合う、和やかな取材の様子

当事者にとって、社会に出る際の大きな障壁の一つが仕事です。「てんかん」の治療中という理由で採用の扉が閉ざされてしまう現状があります。

熊谷さんは、働くことへの葛藤を語ります。「てんかんがあることで勤務時間が制限されることや、周囲の不安から軽い仕事しか任せてもらえないことがあるのが悩みでした」。そんな熊谷さんも、現在は念願のフルタイムで勤務しています。「職場に認められるまでに10年かかりました」と話す姿には、積み重ねてきた切実な思いが込められていました。

こうした現状について、宮城県支部代表の松崎さんは「企業側の不安から採用後もさまざまな制約を受け、本人の能力が生かされないことがあります」と話します。

働くということ



事務局の萩原さんも「業務を固定され、成長の機会すら得られない当事者の声も届いていません」と課題を訴えます。そんな中、老人福祉施設で13年勤め続ける沼田さんは、自身の経験から次のように語ります。「ありのままを受け入れてくれた職場の存在が本当に大きかったです。今は利用者さんからの『辞めないでね』という言葉が励みです。できないことを探すのではなく、できる部分を理解者と一緒を探してほしい。得意なことを生かせる場所が私たちには必要なんです」

伝える続け、つながること

宮城県支部が日々の活動で最も重視しているのは、「一人で悩まない」ことだといいます。

その取組の一つは、当事者同士

が語り合い、互いの力になることです。実際に顔を合わせて学び、語り合う時間は、明日への活力につながっています。高倉さんは、週3回の透析による身体のきつさを抱えながらも、仲間と言葉を交わすこの場を大切にしています。

もう一つは、周囲に正しく理解してもらい応援の輪を広げることです。取材当日は不在でしたが、当事者家族の齋藤さんからは「お互いに『何かあった時はサポートしますよ』という優しい見守りが、当たり前のようには地域に広がってほしい」とのメッセージが寄せられました。「分かってくれない」と嘆くのではなく、丁寧に伝えていくことが、現状を変える力になります。

萩原さんは、今後の活動について次のように話します。「宮城県支部の『波の会』という名称には、その名の通り『理解が波のように穏やかに広がってほしい』という願いが込められています。これからも仲間を増やしながら、この理解の波を地域社会へと広げていきたいと願っています」



▲パープルデーイベント 宮城県支部のブース

日本てんかん協会 宮城県支部「波の会」について

47都道府県にネットワークを持つ全国組織の支部として、宮城県内各地で当事者や家族を支えています。主な活動は電話相談の対応や毎月の定例会の開催です。当事者やその家族が不安や経験を気兼ねなく語り合い、「一人ではない」と実感できる居場所づくりを大切にしています。また、サマーキャンプや芋煮会などのレクリエーション活動も行っています。さらには、機関紙「みやぎの波」の発行や、てんかんへの正しい理解を広めるための啓発活動を行っています。

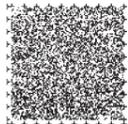
パープルデー関連イベントのお知らせ（予定）

宮城県内でもてんかんの理解の輪を広げるためのパネル展示や啓発イベント、各地のランドマークをパープル（紫色）にライトアップするイベントが行われます。

イベント	開催日	場所
パネル展示	令和8年3月16日(月)から3月27日(金)まで	宮城県庁2階 西側回廊
啓発イベント	令和8年3月21日(土)	イオンモール仙台上杉
ライトアップ	令和8年3月25日(水)から3月27日(金)まで	・仙台放送 仙台スカイキャンドル ・東日本放送 鉄塔 ・三井アウトレットパーク仙台港 観覧車「ポートフラワー」



▲仙台市市民活動サポートセンターでの展示



福祉の仕事と働く人を支える 宮城県福祉人材センター



「福祉人材センター」は、都道府県知事の指定を受けて都道府県社会福祉協議会が設置・運営をしています。職業安定法に基づき厚生労働大臣の許可を受けた、介護・福祉分野専門の無料職業紹介事業所です。求職者の相談は登録制で、来所や出張相談などのほかインターネットからも登録できます。登録することで、WEBサイト「福祉のお仕事」で全国の求人票を閲覧し、紹介状の発行など応募ができます。来所や電話での相談にも対応します。また、宮城県福祉人材センターでは、福祉の職場説明会・ガイダンス・移動相談会・各種講習会を開催し、福祉人材の育成や発掘に努めています。

令和7年度は新たに、8月に宮城県保育士・保育所支援センターと共催で保育の仕事に関心のある学生及び一般求職者を対象に、宮城県内の保育所や認定こども園の職員と直接話ができる職場説明会「みやぎ保育のしごとガイダンス」を開催しました。今回は、宮城県内の31の保育所や認定こども

園が参加し、それぞれの法人の特色や仕事の内容、募集求人について学生や求職者へ説明しました。参加者からは「園選びの参考になりました」、「保育士の資格はないが、調理補助や事務補助の仕事があることがわかり収穫がありました」といった声がありました。これからも皆様からのご意見を参考に、福祉人材の確保につながるような説明会やガイダンスを開催します。



▲みやぎ保育のしごとガイダンスの様子



介護の資格 届出制度について

少子高齢社会の中、介護を必要とする高齢者が増え、介護の資格を持つ人材がとても貴重な存在となっています。国は社会福祉法を改正し、介護福祉士の資格を持つ方が一度職を離れても、円滑に復帰し、介護の仕事で再び活躍いただけるように福祉人材センターへの届出を努力義務としました。「福

祉のお仕事」ホームページから届出登録をさせていただくと、介護に関する最新情報や研修、就職支援の提供など福祉人材センターによるサービスを継続して受けることが可能となります。その他、下記の資格を保有または研修を修了している方を対象に登録を受け付けています。

福祉人材センターへの届出対象資格・研修 ※介護福祉士は届出が努力義務となっています。	
●介護福祉士	●社会福祉士
●介護職員初任者研修	●精神保健福祉士
●介護福祉士実務者研修	●保育士
●旧ホームヘルパー養成研修1級、2級課程	●介護に関する入門的研修
●旧介護職員基礎研修	●生活援助従事者研修

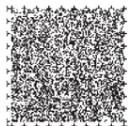


下記二次元コードから「福祉のお仕事」へのマイページ登録・資格届出ができます。

宮城の福祉の仕事 求人平均基本給(職種別)

時給制		月給制	
職種	平均額	職種	平均額
介護職(ホームヘルパー以外)	1,102円	介護職(ホームヘルパー以外)	191,195円
ホームヘルパー	1,330円	ホームヘルパー	212,025円
介護補助(介護助手)	1,040円	介護支援専門員	226,087円
相談・支援・指導員	1,109円	相談・支援・指導員	192,809円
看護職	1,330円	看護職	232,178円
保育士	1,129円	保育士	197,987円
		セラピスト	233,574円

※上記の賃金は、宮城県福祉人材センターに登録されている求人票にある基本給(一律手当を含む)の平均値です。「福祉のお仕事」賃金統計(10~12月分)より抜粋しています。
※セラピストとは、理学療法士や作業療法士、言語聴覚士などの資格の総称です。



福祉のお仕事



検索 <https://www.fukushi-work.jp/>

お問い合わせ
宮城県福祉人材センター
(TEL : 022-262-9777)



X(旧Twitter)
フォローしてね♪
@miyagijnzaic

ひとまち ココロ

このコーナーでは福祉の職場で働く人へインタビューを行い、仕事の魅力などを紹介します。

今回は、社会福祉法人白石陽光園 県南生活サポートセンター アサンテ(以下「アサンテ」という。)で活躍する職員に、福祉の仕事の魅力についてお話を伺いました。

普段の業務内容を教えてください。

私が所属している部署では、仙南圏域2市7町の方々を対象とした指定特定相談支援事業※を行っています。相談者の希望を尊重し暮らしをサポートする役割として、主に障害福祉サービスの利用に必要なサービス等利用計画書の作成や、サービス提供事業所との連絡調整を行っています。

※指定特定相談支援事業とは、障害者総合支援法に基づき市町村から指定を受けて、障害者の相談支援を行う事業です。

入職したきっかけを教えてください。

高校生の時に母親と共に祖父の介護をしたことがきっかけで福祉の仕事へ興味を持ち、福祉系学部のある大学へ進学しました。福祉について学ぶ中で、障害者や高齢者の生活を支える仕事をしたいと思うようになり、介護福祉士を取得し社会福祉法人白石陽光園に入職しました。

仕事のやりがいや魅力は何ですか。

アサンテには令和7年4月に異動しました。それまでは障害者の入所施設で利用者への支援を行っており、できなかったことができるようになるなど、利用者の日々の変化と一緒に喜ぶことが魅力だと感じていました。

現在の相談支援業務では、様々な立場の人や関係機関と連携して支援し、相談者が地域で自分らしく過ごせるようになった時にやりがいを感じます。「アサンテと出会えて良かった」と言ってもら



PROFILE

相談員

たかはし なおや
高橋 直也 さん

入職日

平成28年5月1日

休日の過ごし方

釣りやキャンプをよくしています。今は娘と一緒に遊ぶのが楽しみです。

えた時には、この仕事をしていて良かったと強く思いました。

今後の目標を教えてください。

相談者の背景やその思いを知ることはとても難しく悩むこともあります。自分らしい生活を送っていただけるよう寄り添って支援していきたいと思えます。

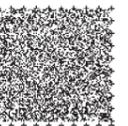
そのためにも相談者の声をしっかり聴き、地域資源の活用や関係団体との連携により、相談者自身で解決できるような支援を行ってまいります。

福祉の仕事を目指す人へのメッセージをお願いします。

福祉の仕事は人に関わる場面が多く、様々なことを考える必要があるため、簡単ではありません。しかし、その分自分自身の成長にもつながるすてきな仕事です。支援を必要とする方々の笑顔や生きがいを支える中で、自分も笑顔になっていることに気づきます。自分も含め、笑顔になれるこの仕事をぜひ一緒に楽しみましょう。

一日の業務の流れ(ある日の仕事内容)

8:30	始業
9:30	利用者宅の訪問
11:00	サービス担当者会議
12:30	休憩(昼食)
14:00	利用者宅の訪問
15:30	ケア会議
16:30	資料作成
17:15	終業





ちいきをつなぐ

家庭や社会のサポートが受けにくい若者たちに安心とチャレンジの場を 特定非営利活動法人まきばフリースクール 自立援助ホーム長 中山さんインタビュー

社会の中で誰にも気づかれず、孤立を深めてしまう若者たちがいます。頼れる身内がない環境や、学校を離れたことで周囲とのつながりが途切れてしまった状況など、彼らが置かれている環境はさまざまです。困難を抱える若者たちに寄り添い、支え続ける取組「ユースサポート・アフターケア」についてお話を伺いました。

特定非営利活動法人まきばフリースクールの取組について教えてください

不登校やひきこもりの状態にある方が安心して過ごせる居場所となる「まきばフリースクール」をはじめ、さまざまな理由により家庭で暮らすことが難しい子どもたちを支える「自立援助ホーム」、障害のある方のための「就労継続支援B型事業所」や「グループホーム」などを宮城県北地域（栗原市・大崎市）で運営しています。その中で、家庭や社会のサポートが受けにくい10代後半から30代の若者のサポートを目的とした取組が、今回紹介する「まきばベース」です。

「まきばベース」とはどのような取組ですか

自立援助ホームを退所した若者、不登校やひきこもりを経験した若者、高校を中退あるいは卒業後に孤立した若者などを対象としています。そうした若者に対し、何度でも立ち戻れる「安全基地」と、望む人

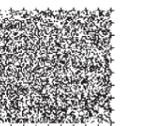
生にチャレンジできる「ベース（基礎）」を育む機会を提供し、どのような状況にある若者も、安心して居場所とチャレンジの機会を格差なく何度でも得られることを目的とした取組です。

支援において大切にしていることは何ですか

まず「安心できる居場所」を整えることです。自立援助ホームを退所した若者は、家庭や社会の支えにつながりにくい状況にあることが多く、困ったときに安心して戻れる場所がない若者が多いのが現状です。だからこそ、何事も要求されず他者と関わりながら安心して過ごせる「安全基地」を提供することを大切にしています。

具体的には、一人一人の状況に応じて生活全般の相談といった個別支援に取り組みとともに、他者とのつながりを感じられる集団活動を行っています。さまざまなゲームを通じてリフレッシュする「まきばゲームス」や、夕食とボードゲームを楽しむ「ボードゲイナーナイトフィーバー」などは、大切な交流の機会です。さら

に、経済的な困難を抱える若者に対して、日々の暮らしを支える支援（食事・生活用品・



これらの活動ならではの強みは何ですか

一番の強みは、こうした日々の交流を通じて緩やかにつながり続けることで「問題が深刻化する前から関わり続けられる」ことです。例えば、ライフラインが止まってしまいうような窮地に陥る前に、「今月は支払いが厳しくて」という困りごとが生じた段階で相談できる信頼関係づくりをしています。この日常的な信頼関係こそが、彼らにとって本当の支えであり、私たちの活動の強みです。

居場所から次のチャレンジへどのようにつなげていますか

居場所をつくるだけで終わっては

納得して一歩を踏み出すことで、はじめて自分の次のステップを考えられるようになる若者もいます。



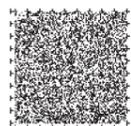
▲自分が使った場所は自分で整える。そこに上下関係はありません。



▲さまざまな状況にある誰もが、全力でボールを追いかけます。

今後の展望について教えてください

まずは、若者が安心して生活を送れるよう個別支援の取組を強化して



▲個別支援の拡充としてフードバンク始動。

問い合わせ先

特定非営利活動法人まきばフリースクール
090 (3127) 8925

いけないとも考えています。「入ったら出られない」支援ではなく、ここを入り口にしてもっと色々な可能性がある人生を味わってほしい。そのため基礎を育む取組を提供し、次へのチャレンジを支えています。



▲無化学肥料・無農薬で育てた野菜の収穫。

例えば、働くことに踏み出したいと願う若者のために、毎週金曜日の午前中に「まきばワークス」という活動の場を設けています。畑仕事や拠点整備などで2時間活動し、1,000円の手当と交通費を支給して、最後は皆でお昼ご飯を食べます。大人になると、平日の昼間から「居場所に行く」ことに劣等感を抱き、ハードルが高く感じる人もいます。「働きに行く」という形にすることで、参加者の心理的な負担が和らぐように取り組んでいます。

スポーツも活動に取り入れていくそうですね



▲拠点整備により、安心して活動できる環境と段取りを整えます。

スポーツならではの関わりを通して、お互いの距離感や信頼関係を学び、働くために必要な体力や物事に取り組む粘り強さを培うため、毎週木曜日にフットサル「まきばFC」の活動を行っています。この活動を通じて、不登校やひきこもりなどで「止まっていた時間」が動き出すことがあります。学生時代にいわゆる「青春」をやりきれず時間が止まってしまった若者が、全力でプレーし区切りをつけることで、「部活をこていたこんな感じだったのかな」という心残りを昇華させていく。そして

宮城いきいきシニアだより

第33回宮城シニア美術展

令和7年12月12日(金)から12月14日(日)までの3日間、せんだいメディアテークで「第33回宮城シニア美術展」を開催しました。

宮城県内の60歳以上の方から寄せられた、日本画、洋画、書、写真、工芸の5部門、計116点の作品を展示しました。

どの作品も長年培われた感性と技術が感じられる力作ばかりで、開催期間中に訪れた約500人の来場者を魅了しました。

開催初日には、各部門の最優秀賞、優秀賞、奨励賞を受賞された皆様の表彰式を行いました。

なお、この美術展の最優秀賞と優秀賞の作品は、今年11月に開催される「第38回全国健康福祉祭埼玉大会」(ねんりんピックの国さいたま2026)美術展部門に宮城県代表作品として出展します。

各部門の最優秀作品



▲写真の部
「七ヶ宿火まつり」石原 三雄/角田市



▲洋画の部
「ハリケーン」大沼 四郎/大崎市

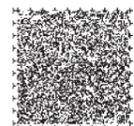


▲日本画の部
「二輪草の咲く頃」佐々木 幸一/名取市



▲表彰式の様子

※令和8年度の第34回宮城シニア美術展は、「せんだいメディアテーク」で令和9年2月に開催予定です。



▲工芸の部
「花瓶」菊地 則行/仙台市



▲書の部
「近代詩文 山本有三 (路傍の石より)」松本 桃芳/仙台市

県社協ってこんなことやってます

＜みやぎボランティア総合センター＞

みやぎボランティア総合センター(以下、「みやぎVC」という。)は、昭和51年に前身となる組織が設置されて以来、地域住民によるボランティア・市民活動の推進と支援に取り組んできました。また、災害に備えた支援体制づくりや誰もが地域で支え合う社会の実現に向けた取組を進めています。ここでは、みやぎVCが行っている主な事業を紹介いたします。

ボランティア・市民活動の充実

みやぎVCでは、市町村社会福祉協議会(以下、「市町村社協」という。)のボランティアセンターを支援し、県内各地でのボランティア・市民活動の活性化を目指しています。

近年、地域住民が抱える生活課題は多様化しており、その解決には住民自身が主体的に関わることがますます重要になっています。そのため、住民を直接支援する市町村社協職員同士が、日頃の活動で得た情報や経験を

共有し、互いに学び合う場が欠かせません。

みやぎVCでは市町村社協のボランティア担当者による会議を開催し、各社協の取組状況や課題について意見交換を行っているほか、「地域福祉コーディネート力向上研修」を実施して、担当者が地域の多様なニーズに応えられるよう、課題解決の手法を学ぶ機会を提供しています。



▲地域福祉コーディネート力向上研修

災害に備えた研修と体制づくり

宮城県はこれまでに大きな災害を経験しています。全国的にも災害が多発しているため、平時からの備えが大切です。また、

災害時には、地域の多様な主体が力を合わせて活動することが重要です。

そこでみやぎVCでは、市町村社協が設置する災害ボランティアセンターが円滑に運営できるように、平時から研修会を開催しています。災害時には多くのボランティアが被災者支援に関わるため、受入れ体制や調整方法、関係機関との情報共有など、事前準備と連携が不可欠となっています。



▲災害ボランティアセンター準備・運営研修

災害ボランティアセンター関係の研修では、運営に必要な知識や技術を学び、災害発生時に迅速かつ的確な対応ができる体制づくりを進めています。これ

らの取組は、地域住民の不安軽減にもつながると考えています。

福祉教育の推進に向けて

誰もが地域で支え合う社会を実現するためには、互いの立場や違いを理解し、他者を思いやる気持ちを育む福祉教育の推進が重要です。福祉教育は、学校や地域の講座などで実践されています。

みやぎVCでは、福祉教育学習会や市町村社協の担当者による情報交換会を開催して、福祉教育の推進を図っています。福祉教育は、地域住民を中心に、学校・行政・福祉関係者など多様な主体が協力して取り組むことが求められますので、これからも皆様の御協力をお願いいたします。

問い合わせ先

みやぎボランティア総合センター
022(739)9843

